「他者の中の自己」と「個としての自己」

── 自己観から見るポライトネス表現比較 ──

井筒（成田）美津子

1．はじめに

何かを依頼するとき、英語では Would you like to do ～? と言うことがある。これを日本語に直訳すると、「あなたは～なさりたいですか」となる。日本語を学ぶ英語母語話者は、しばしば、依頼にこの英語を直訳した「あなたは～なさりたいですか」或いは「～したいですか」といった願望疑問文を使い、語用論的な誤解を生み出してしまうことがある。日本語では、このような場合、願望疑問文ではなく、「～してくれませんか」や「～してもらえませんか」などの授受表現を用いる。このような言語表現上の違いは、なぜ生じるのだろうか。

本稿では、異文化コミュニケーションにおいて誤解が生じやすい 4 種類の言語表現（間接表現、謙遜表現、常套句、人称詞）を取り上げ、これらの日本語と英語の違いを「自己観」という点から論ずる。一般的に述べられている日本語と英語の違いを、文化心理学で指摘されている二つの自己観の違いから考察することにより、4 つの異なる言語現象の統一的理解を目指す。

2．「相互協調的自己観」と「相互独立的自己観」

相対的に見ると日本人を含む東洋人は他者や状況（場）への依存度の高く、西洋人は個人主義的な傾向が強いということは、これまで比較文化論の書物の中で数多く指摘されてきた（中根　1967、土居　1971、ベネディクト　2005 [1972]、Hall 1976、1983 など）。近年では、文化心理学という研究分野の中で、

このような文化的価値観の違いを心理的プロセスの観点から捉えようとする試みがなされている。その中で、東洋文化に見られる文化的価値観は「相互協調的自己観」、欧米文化に顕著な価値観は「相互独立的自己観」と呼ばれ、人間の心理的機能に影響を与えていると考えられている(Kitayama & Markus 1991、北山　1998 ほか)。相互協調的自己観によれば、自己とは「本質的に関係志向的実体」であり、「人間そのもの、あるいはそこにある関係性の中で意味づけられている自分の属性が、そこにおける自己の中心的定義」となる（北山　1998：39)。これに対して、相互独立的自己観では「自己とは他の人や周りのものごととは区別され、切り離された実体」であり、「周囲の状況とは独立にある主体の持つ様々な属性によって定義」される（北山　1998：38)。

これら二つの自己観の違いは、人間の認識、感情、そして動機づけなどの心理学的現象に反映される。例えば、自己の認識（自己認知）を例にあげると、「私は…だ」という刺激に対して自己記述させる実験では、相互協調的自己観が優勢な文化圏の被験者は、「私は京大生だ」、「私は母親だ」などのように社会的に規定された属性を記述する割合が高いのに対して、相互独立的自己観が優勢な文化圏の被験者は、「私は親切だ」などの人格的特性に関する自己記述が高くなる傾向が見られる(北山　1998：52-54)。また、感情面においても、「うきうき」とか「リラックスした」という肯定的な感情は、日本人の場合、自己を対人関係に関与させることによって生じる「親しみ」や「尊敬」といった「関与的肯定感情」と高く相関するのに対し、アメリカ人の場合、「誇り」や「有頂天」といった自己の独立という課題の成功によって得られる「脱関与的肯定感情」との関連性が高いということが指摘されている（北山　1998：61-62)。

本稿では、これらの「相互協調的自己観」と「相互独立的自己観」をそれぞれ「他者の中の自己」と「個としての自己」と呼び、文化心理学的に実証されているこれら二つの自己観が言語学的にも様々な現象に現われていることを考察する。とりわけ、ポライトネスという点から特に重要となる 4 種類の言語表現（間接表現、謙遜表現、常套句、人称詞）を取り上げ、これらの表現に見られる日本語と英語の違いは二つの自己観の違いに起因することを示す。また、

二つの異なる自己観を把握することにより、これらの表現を非母語話者が使用する際に見られる語用論的誤り（pragmatic failure）（Thomas 1983）への大局的理解が可能になることについても併せて触れる。

3．日本語と英語の間接表現

3.1　形式上の相違点

依頼（request）や申し出・提供（offer）、招待（invitation）などの発話行為を行うとき、我々は慣習化された間接表現を用いることが多い。Brown & Levinson (1987：132-145) によると、このような間接表現の使用は、様々な言語に見られる普遍的なポライトネスの手段で、彼らのポライトネス理論では、相手への負担を軽減したり、個人領域への侵害を抑えるネガティブ・ポライトネス（negative politeness）のストラテジーの一つとされている。

まず、「依頼（request）」の発話行為に焦点を当て、日本語と英語の慣習的な間接表現の違いを見ていく。Brown & Levinson が述べているように、確かに日本語・英語とも依頼を表す間接表現は存在する。しかし、用いられる形式には大きな違いがある。

(1)　a．窓を開けてくれる？
　　b．窓を開けてくれない？
　　c．窓を開けてくれませんか？

(2)　a．窓を開けてもらえる？
　　b．窓を開けてもらえない？
　　c．窓を開けてもらえませんか？

(3)　a．窓を開けて頂ける？
　　b．窓を開けて頂けない？

c．窓を開けて頂けませんか？

(4) a．Can you open the window?
b．Could you open the window?

(5) a．Will you open the window?
b．Would you open the window?

(6) a．Do you want to open the window?（窓を開けてもらえる？）
b．Would you like to open the window?（窓を開けてくれませんか？）

(7) a．Do/Would you mind if you open the window?
b．Do/Would you mind opening the window?

日本語の(1)～(3)と英語の(4)～(7)を比較すると、「依頼」を表す慣習化された間接表現には次のような違いがある。

(8) 日本語：「くれる／もらう／頂く」といった授受を表す補助動詞
英　語：「意志」、「能力」、「願望」、「意向」を尋ねる表現

つまり、「依頼」を表す際、日本語では授受動詞を肯定疑問あるいは否定疑問の形式で用いることが多い[1]。これに対して、英語では「意志」を尋ねる法助動詞 will や「能力」を尋ねる法助動詞 can（あるいはそれらの過去形）、或いは相手の「願望」を問う Do you want to do～?/Would you like to do～? や依頼事項

[1] 英語では *Can't/Couldn't/Won't/Wouldn't you open the window?* のような否定疑問文を用いた形式は、「依頼」の意味では無礼に聞こえる（cf. Brown & Levinson 1987: 135, Leech 1983: 108）。大杉（1982：127）は、これらの文について「Open the window, please より丁寧。本例は否定形の要求表現で pushing, insisting の含みがあり、(…) 肯定形の要請表現より一般的に丁寧さが劣るので余り用いない」と述べている。

の遂行を気にするかどうかの「意向」を問う Do/Would you mind〜? の形式を用いるのが一般的である[2]。

英語では、「申し出・提供（offer）」や「招待（invitation）」の場合でも相手の「願望」を問う願望疑問文を用いる。

(9) a. Would you like me to open the window?（窓を開けましょうか？）
b. Would you like to come with me?（一緒に行きませんか？）

日本語の場合、「依頼」のような授受を表す補助動詞ではなく、「申し出・提供」には「〜します」や「〜しましょうか」、「招待」には「〜しませんか」のような否定疑問文を用いるのが一般的である。

3.2 語用論的転移（pragmatic transfer）

前節で見たような日本語と英語の間接表現の違いがあるために、それぞれの言語を外国語として学ぶ学習者は、母語からの言語転移（language transfer）によりこれらの形式を用いる際に当該言語では適切なはずの表現を使うことを躊躇したり、語用論的な誤り（pragmatic failure）（Thomas 1983）を起こすといったことがしばしばある。

例えば、日本語を学ぶ英語母語話者が日本語で「依頼」を表現する場合、しばしば英語の Do you want to do〜?/Would you like to do〜? に相当する願望疑問文を用い、(10)のように「依頼」を表現する。

(10) 窓を開けたいですか？

[2] Green（1975）や Wierzbicka（1985：§5）などは依頼表現として、Why don't you〜? の形式も挙げているが、ここではこれを慣習的には「提案（suggestion）」の発話行為を表すものとみなす。この表現が依頼の意としても解釈できるのは、「提案」の様相を呈しながらも、「依頼」あるいは「命令」しようとする話者の意図があるからである。

水谷（1985）は、このように日本語で依頼を表現する際の難しさについて次のように述べている。

> 教師に答案などを渡そうとして、「Would you like to look at this? → 先生、コレ見タイデスカ」としたりする。この場合の Would you like to〜? は実は丁寧な依頼であるから「先生、これをごらんいただけますか」のような丁寧な依頼表現に切りかえなければならない。(…)欲求表現の主語に二人称をそのまま用いた不適切性に加えて、表現意図と表現方法の組み合わせの誤りをおかしたものといえる。　（水谷　1985：39-40）

このような語用論的誤りは、「申し出・提供」や「招待」の場合でも同様で、日本語を学ぶ英語母語話者は「これをコピーしましょうか」や「一緒に行きませんか」という意味を日本語で(11)のように表現したりする（庵ほか　2001：241、水谷　1985：39-40）。

(11)　a．これをコピーしてほしいですか？
　　b．一緒に行きたいですか？

これらは明らかに Would you like me to make a copy of this? や Would you like to come with me? を日本語に直訳したものだが、日本語としては語用論的に不適切である[3]。(11a)のような申し出を受けると、日本人は「やってもらいたそうな顔をしてたかな」としきりに反省するだろうし、(11b)のような日本語

[3] 但し、一般的に願望疑問文は「〜したいですか」「〜ほしいですか」などの丁寧語と共起する場合に不適切であって、(1)ウチの相手への発話や(2)答えが Yes と分かっている場合には問題ない（庵ほか　2001：241）。
（ｉ）　また行きたい？（親しい人に対して）
（ii）　一緒に来たい？（Yes の返事が予想される場合）
庵ほか（ibid.）は、(10)や(11)のような誤用が無くならないのは、母語からの転移だけでなく、今述べたような使用に関する複雑な語用論的な制約があるためであると述べている。

で招待されたら、「冗談じゃない、誰が行きたいものか」(鶴田ほか　1988：178)と思うだろう。

逆に、英語を学ぶ日本語母語話者は、願望疑問文の使用に抵抗を感じる人が多い。例えば、「申し出・提案」の Would you like me to do〜? は日本語に直訳すると「私に〜してほしいですか？」という意味になるので、日本語だと多少恩着せがましい印象があるように感じられ、願望疑問文の使用に迷いを感じる場合がある（川村　2006：154)。

3.3 「自己観」の相違から見る日英の間接表現形式

日本語と英語の「依頼」の間接表現形式が(8)にまとめたように異なり、そのために前節でみたような語用論的な誤りが生じる。こういった語用論的な誤りは異文化間のコミュニケーション上の問題を作り出す主要な要因の一つであることは間違いない。このような問題を解決するには、もちろん二つの言語の表現形式の違いを教育現場で提示していく必要性はあるが、それだけでは不十分である。庵ほか (2001：241) が述べているように、日本語学習者の中には願望疑問文は無礼ではなく、「聞き手の意向を聞いてあげるのだからむしろ親切なことだ」などと考える者も少なくない。

このような問題を解決するには、日本語・英語の母語話者が有する「自己観」の違いを相互認識する必要がある。なぜ日本語では相手の意向を聞くことが必ずしも好ましくないのか、また逆に、なぜ英語では何よりもまず相手の意向を聞く必要があるのか、この異文化間の理解の違いの根幹にあるのが自己観の相違である。他者との相対的な関係の中で自己を位置づけるのか、それとも自己をあくまでも周囲から独立した「個」とみなすのか、この「他者の中の自己」と「個としての自己」という自己観の違いを、特に授受関係の中で捉えてみると、間接表現に見られる日本語と英語の形式上の違いが容易に理解される。

まず、「依頼」の場合について考える。日本語では「くれる／もらう／頂く」といった授受表現を用いるが、これには日本語の「授受」という概念に付随する非対称的な人間関係が関わってくる。授受関係には、与える側の「与益者」

と与えられる側の「受益者」が存在するが、日本語では両者の間には対等な関係はなく、暗黙の上下関係が存在する。与える側は何らかの恩恵を授ける、与えられる側は恩恵を受け、さらに受けた恩に報いるための何らかの返済義務を負う。すなわち、与益者は上位、受益者は下位に位置づけられるのである。

「恩（オン）」に伴う上下関係について、ベネティクトは『菊と刀』の中で次のように述べている。

> 人は目上の者から恩を受ける。そして目上、あるいは少なくとも自分と同等であることの明らかな人間以外の人から恩を受ける行為は、不愉快な劣等感を与える。　（ベネディクト　2005［1972］：123）

つまり、「親に対する恩」とは言えるが、「子供に対する恩」ということは出来ないのである（ベネディクト　2005［1972］：122-123）。

何かを依頼するということは、恩恵を請うことである。この受益行為に「くれる／もらう／頂く」といった授受を表す補助動詞を用いるのは、聞き手を与益者として表現することによって、話し手よりも相対的に上位であることを示すためである。たとえ同等の立場にある人に対しても、相手を与益者として扱うことによって、一時的に上位者としての社会的地位を作り出し、相手を立てることが出来るのである。

与える側は上位、与えられる側は下位という授受表現によって伝えられる上下関係は、(12)のような「申し出や提供」を表す表現が目上に対してはあまり相応しくないということからも明らかである。

(12)　a．？その荷物、包んでさしあげましょうか。（店員が客に）
（庵ほか　2001：166）

b．？先生、駅まで送ってさしあげましょうか。（学生が先生に）
（ibid. 167）

c．？お手伝いしてあげましょう。（目上の人に）　（守屋　2002：16）

「申し出・提供」は話し手が聞き手に恩恵を与える行為である。この場合、与益行為自体が話し手を上位としてしまうため、それをさらに言語表現として明示するとその与える行為が「恩着せがましい印象」（庵ほか　ibid.）になってしまう[4]。(12c)は日本語を学ぶ外国人の発話例であるが、このような微細な語用論的ニュアンスは日本語学習者にとっても難しい（守屋　2002：16-17）。

このように「依頼」という受益行為と「申し出・提供」という与益表現で、授受を表す補助動詞の敬意表現としての適切さが異なるという事実は、上で述べた「与える側」＝上位、「与えられる側」＝下位という日本的考えを具現化している。話者が「与えられる側」となる「依頼」では授受表現は適切だが、「与える側」になる「申し出・提供」の場合、目上の人に対しての授受表現は不適切になる。つまり、敬意表現としては、話し手自身を下位に位置づける表現は適切であるが、話し手を上位に位置づける表現は用いない方が賢明なのである。このことは、日本語話者が常に他者との相対的な関係の中で自己を位置づけるという相互協調的自己観、すなわち「他者の中の自己」を有していることを示す。相手がどんな人なのか、自分よりも社会的に上か下かなどを常に推し量りながら、言語表現の選択をしているのである。

これに対して英語は、丁寧さを表すのに、相手の「意志」や「能力」、「願望」、「意向」を尋ねる表現を用いる。これは、話し手が聞き手との相対的な位置関係への配慮を示し、自らを低める工夫をするのではなく、同じ一人の人間として相手の考えを尊重しているということである。英語の場合、むしろ、相手の意思を勝手に決めつける方が無礼になる。「申し出」の際に用いる Would you like me to do〜? に対する日本人の戸惑いに対して、次のようなコメントをしている英語母語話者がいる。

---

[4] ここでは、謙譲語を用いた方が語用論的により適切である。
（i）　その荷物、お包みします。
（ii）　先生、駅までお送りします。
（iii）　お手伝い致します。

> It is polite to ask someone if they need something rather than just assuming, especially if you don't know that person too well.
>
> (川村　2006：155)

つまり、英語では特に相手のことをよく知らない場合、勝手に何かが必要だと決めてかかるより、相手に確認した方が丁寧だというのである。ここには、何らかの共同体の中で位置づけられる「他者の中の自己」ではなく、「個としての自己」を優先する自己観（相互独立的自己観）がある。互いを「個」として認め、尊重し合っているからこそ、相手の意思を確認するのである。

4.「自己観」からみる謙遜

次に、日本人が美徳とする「謙遜」という概念を自己観という観点から捉えてみたい。謙遜がポライトネスの一つであるということは、Leech (1983) が謙遜の公理（Modesty Maxim）をポライトネスの公理（Maxims of Politeness）の一つとして挙げていることからも明らかである。Leech は、謙遜の公理は英語にも働くが、特に日本語は英語圏よりもその重要性が高いということを指摘している。

> It appears that in Japanese society, (---) the Modesty Maxim is more powerful than it is as a rule in English-speaking societies, where it would be customarily more polite to accept a compliment 'graciously' (*eg* by thanking the speaker for it) rather than to go on to denying it.
>
> (Leech 1983: 137)

実際、英語圏では、「お一つどうぞ」とものを勧めると、niggardly（けちな）人だと誤解されてしまう。

In offering food to a guest, a Japanese may say *Ohitotsu dozo* (literally 'Please [have] one') (---). In contrast, an English-speaking host might well be considered niggardly if he passed round the peanut-bowl with the words: *Have a peanut!* It is normally considered to be more polite to offer a large quantity: *Have as many as you like.*"

(Leech 1983: 138-139)

英語圏では、謙遜の公理よりも寛大さの公理（Generosity Maxim）を優先し、Have as many as you like といった表現の方が一般的である。

日本語では、何かを提供するときに、(13)のような謙遜表現が非常に多く使われる。このような謙遜表現の多様さについては、日本語では謙遜の公理が強く働くからとか、日本人は謙遜を美徳とするからなどと言われるが、ここでは、自己観とういう観点から「提供」と「謙遜」という二つの概念の関係についてもう一歩踏み込んで考えてみたい。

(13) a．お一つどうぞ。
b．つまらないものですが。
c．何もありませんが。
d．お口に合わないかも知れませんが。
e．粗茶ですが。

3.3 で見たように、日本語では、授受行為において与える側が上位、受け取る側が下位という上下関係を想起されることが多い。「提供（offer）」も何かを与える行為である。授受行為によって作り出される上下関係においては、与える側の話者が上位になり、与えられる側は、与えられた恩に報いるための何らかの返済義務を負う立場になる。(13)のような謙遜表現は、このように一時的に作り上げられた相手との上下関係を是正する手段と考えられる。自らが提供するものやサービスの価値が低いことを表現することによって、相手の返恩の義

務を軽減し、受け取り易くするのである。

> 誰かに物をあげたいとき、そのことを伝える表現の選択にしばしば人が迷うのは、相手が目上であれ目下であれ、物をもらった側が〝借り・負い目〟を感じてしまう可能性がつねにあるからであり、通常与え手＝話し手は、相手になるべくそれを感じさせない表現を選ぼうとする。
>
> （滝浦　2001：59、下線筆者）

ここにも他者との相対的な関係を配慮した日本人の自己観が見られる。ものを与える行為によって自らが不本意ながらも上位になってしまう。これを出来る限り避けるために、相手に「借り・負い目」を感じさせない、相手が下位にいることを感じさせない表現を選ぶのである。

これに対して、英語では「個」を尊重する。英語でものをあげるとき、日本語の(13)に相当する、以下の(14)のような表現は決して用いない。英語母語話者に「何もありませんが」と言うと、“Then, let's go to a restaurant!”（じゃあ、レストランにでも行きましょう）と言われるだろうし、「粗茶ですが」と言いながらのお茶を出すと「粗末だとわかっているのに、何故客に出すのか」と言われてしまう（直塚　1980：63-68)。英語ではこのような場合、(15)のような表現を用いる。

(14)　a．† Have a peanut.
　　b．† This is a gift which will be of no use to you.
　　c．† Sorry we have nothing to serve you.
　　d．† It may not suit your taste.
　　e．† Have some bad tea.

(15)　a．I hope you like it.
　　b．I'm sure you like it.

(15)のような表現は、相手の趣味や好みを理解した上で、ものを提供しているということを表す。つまり、相手の「個」に配慮した表現である。

この「個」への配慮に関して、外山（1992）は面白いエピソードを挙げている。日本に住むアメリカ人が日本人の奥さんから果物をもらった。この果物は、その日本人宅に来た知り合いが、そのアメリカ人宅の庭先に車を駐車させてもらっているお礼に渡したものだった。もともとは日本人の奥さんに持ってきたものだが、駐車のお礼にアメリカ人に渡してほしいと頼んだのだ。これに対するアメリカ人の奥さんの反応は次のようなものである。

> ところがアメリカ人は喜ばない。どうしてくれるかわからないのだ。やるといわれても迷惑だと感じる。こちらがくだもの好きだとわかってくれたのではない、しかも、会ったこともない人からのくだものをどうして受け取れるか。相手かまわず、そういうものをくれるのは、こちらの人間、個性を無視していて、面白くない。駐車させてもらってありがたいとおもったのなら、なぜ本人がやってきて、ひとこと、ありがとう、と言ってくれないのか。その方がわけのわからないくだものをもらうよりどれだけうれしいか知れない。（外山　1992：147）

外山（1992：147）は「プレゼントしていいのは、相手の好み、趣味をよく知っていて、それに合ったものがあるときである」と続ける。自分がもらったものを隣人にまわすのは、その隣人の個性を無視することであり、「個としての自己」への配慮が欠けているのである。

5．「自己観」から見る常套句

「他者の中の自己」と「個としての自己」という二つの自己観は、日本語と英語の常套句（決まり文句）の違いにも見られる。日本語で(16)のような表現は、実に様々な場面で用いられる。

(16) a．よろしくお願いします。
b．お世話になります。

しかし、英語では直接これらに相当する表現はなく、各場面に合わせた表現を使い分ける必要がある。例えば、初対面のあいさつで用いる「よろしくお願いします」は、英語では It's a pleasure to meet you などと言うし、仕事・プロジェクト開始時の「よろしく…」は I'm looking forward to working with you、仕事を依頼するときの「よろしく…」は Thank you in advance for your help などのように場面によって異なる（バーガー　2008：13）。

英語で「よろしくお願いします」や「お世話になります」のような表現が無いのは、ポライトネスの考え方に反するからである。西欧で提案されているポライトネスの理論や原理では、相手への負担（imposition）を減らすというのがポライトネス手段の一つである[5]。例えば、何かを依頼する場合、ただ「貸して！」というよりも「ちょっとだけ貸して！」のように相手への負担を少なく見せる方が話者の目的を達成しやすい。しかし、日本語の「よろしくお願いします」や「お世話になります」はこの逆で、相手へのお願いや負担をはっきりと明示し、断定している表現である。これらの表現は相手に選択肢を与える疑問文にもなっていない。なぜこのような表現が日本語では頻繁に用いられるのだろうか。

Matsumoto（1988）は、「よろしくお願いします」や「お世話になります」といった表現を“relation-acknowledging device”（関係認識表現）と呼び、このような表現を持つ日本語はフェイス（特にネガティブ・フェイス）の概念から考えると極めて異質であると主張している。既に触れたように、Brown & Levinson（1987）のポライトネス理論では、ネガティブ・フェイスとは「自分の領域を侵害されたくない」という願望である。このような願望が普遍的であ

[5] ポライトネスの原理（Leech 1983）の Tact Maxim（Minimize cost to *other*）、ポライトネス理論（Brown & Levinson 1987）の Negative Politeness: strategy 4（Minimize the imposition R*x*）など。

ると考える限り、「よろしくお願いします」や「お世話になります」といった負担（領域の侵害）を明示する表現の存在は理解し難い。そこで、Matsumoto (1988) は、このような relation-acknowledging device を用いる日本人にとって重要なのは、個人の領域を守るということよりも、他者との相対的な関係における自分の地位であると主張し、Brown & Levinson のフェイス概念の普遍性を批判した。

> What is of paramount concern to a Japanese is not his/her territory, but the position in relation to the others in the group and his/her acceptance by those others. Loss of face is associated with the perception by others that one has not comprehended and acknowledged the structure and hierarchy of the group. (Matsumoto 1988：下線筆者)

日本人は「よろしくお願いします」や「お世話になります」と言うことによって、自らが相手の世話になっている、すなわち相手より下位にあることを表現し、他者との関係における自分の地位を自らが認識していることを示すのである。Matsumoto (1988) が言うように、日本社会で面子を失うのは、こういった自らの立場・地位を認識していないことに起因する。すなわち、「身の程知らずな」、「立場をわきまえない」、「分不相応な」、更には「空気が読めない（KYな）」場合である。

言い換えると、日本語で「よろしくお願いします」や「お世話になります」といった表現が可能なのは、このような「他者の中の自己」を求める自己観が存在するからであり、英語でこういった常套句が存在しないのは、「個としての自己」を尊重するからである。個人を尊重する英語では、当然、相手への負担や個人領域への侵害を明示する表現は好まれない。英語ではむしろ、Help yourself to some drink などのように「個としての自己」を配慮する常套句が多い。Help yourself (…) は、直訳すると「自分自身で取って下さい」という意味で、日本語で考えると自分で食べ物や飲み物を取らなければならないなんて、もて

なしの気持ちの欠片も無いと感じてしまうかもしれない。しかし、英語では個人の選択意思を尊重する表現として、このような表現は極めて自然なのである。

6.「自己観」から見る自称詞・対称詞

「他者の中の自己」と「個としての自己」という自己観の相違は、自称詞や対称詞の違いにも見られる[6]。鈴木（1973：6章、1983）が指摘しているように、日本語では、目上の人に対して、「お兄ちゃん」や「カツオお兄ちゃん」のような親族名称や「課長」や「フグ田課長」、「先生」や「伊佐坂先生」のような地位名称を用い、一般的に「波平、電話だよ」のように、名前だけで呼ぶことはない。これに対して、目下の者に対しては、「ワカメ、電話だよ」のように呼び捨てで呼ぶことが出来る。また、自称詞についても、目上の人と話すとき、（ワカメがカツオに）「ワカメ、お腹すいた」のように自らを呼び捨てで指すことが出来るが、目下（例えば、タラちゃん）との会話では「ワカメ、お腹すいた」のように言うことはあまりない。逆に、目下との会話のときには、（フネがカツオに）「お母さんはね…」、（先生が生徒に）「先生はね…」と自らを指すのに親族名称や地位名称を用いることができるが、（カツオがフネに）「息子はね…」、（生徒が先生に）「生徒はね…」のように自分について言及することが出来ない。つまり、日本語では、自己と他者との上下関係を推し量りながら、自己と他者の呼び方を選んでいるのである。相手が目上か目下かを把握した後でしか、自分や相手について言及することが出来ない。ここにも「他者の中の自己」という自己観が見られる。

これに対して、英語の自称詞は対話者が誰であろうとIである。また、他者を

[6] 人称詞は、自称詞、対称詞、他称詞に分けられる。自称詞は、話し手について言及する表現、対称詞は聞き手について言及する表現（指示用法、呼格用法）、他称詞は話題となる第三者について言及する表現で、広い意味で西欧諸言語の一人称、二人称、三人称にそれぞれ対応する。鈴木（1973：6章）は、日本語と西欧諸言語との人称表現の使われ方の違いから、日本語では人称代名詞という言葉を用いずに、人称詞という言葉を用いた。本稿でも、鈴木（1973）に従い、人称詞（自称詞、対称詞、他称詞）という用語を使用する。

呼ぶ場合でも、“Sister, come here!”とか、“Manager Fuguta…”、“Teacher Isasaka…” などのように親族名称や地位名称を用いることはない[7]。対称詞としては、指示用法では代名詞の you（及びその変化形）、呼格用法としてはファースト・ネームか、姓に Mr./Ms. などを付けた形式を用いるのが一般的である[8]。相手の社会的立場に関係なく、一人の人間（個）として、自己を表現し、対話者について述べる。まさに、「個としての自己」の現れである。

英語の場合、相手との社会的関係が絶対的なものではないので、相手の呼び方も場面によって変化する。鶴田ほか（1988）は次のように述べている。

> 日本語社会では教師と学生は、卒業後もその「教師と学生の間柄」を、上司と部下は、勤務時間外もその上下関係を保ち続けることが多い。そして、互いにいつも同じ呼び方で呼ぶ傾向がある。これに対し英語社会では場面によって相手をどう呼ぶかを変える傾向がある。ということは、英語社会では、人と人との間柄は基本的には対等な「個人対個人」であり、仕事上の立場や社会的立場は固定的に不変のものではなく、場面に応じて使い分けられる役割にすぎないという考え方が、日本語社会に比べると強いと言える。（鶴田ほか　1988：12）

ここでも書かれているように、日本語で対称詞の選択を決定付けるのは、相手との相対的な上下関係だが、英語の場合、それはあくまでも「個人対個人」の関係なのである。

さらに、最近の日本で興味深いのは、特にはっきりとした上下関係が見られない母親同士の間でも、「○○ちゃんママ」と役割名称を用いて呼び合うように

---

[7] 但し、父母・祖父母は、親族名称で呼びかける場合がある（“Come here, Dad!”）。brother や sister は「同志」の意味では対称詞として用いられるが、兄弟姉妹の意味では「呼びかけには用いない」（『ジーニアス英和大辞典』s.v. *brother* 1）。

[8] 英語では、呼格用法として代名詞 you が用いられることもある（Behave yourself, you. 行儀よくしろよ、お前）。しかし、この用法は「非常に失礼な呼びかけ」になることが多い（ジーニアス英和大辞典』s.v. *you* 3）。

なってきているということだ。これは、母親同士が互いをファースト・ネームで呼び合う英語とは対照的である。日本の場合、母親同士の関係というのは、あくまでも母親という役割を通して結び付けられているもので、「個人対個人」という関係が希薄であるということなのだろうか。

7．まとめ

本稿では、慣習的間接表現、謙遜表現、常套句、人称詞というポライトネスに関わる4種類の異なる言語表現を取り上げ、これらの表現の日本語と英語の違いに通底するものとして「他者の中の自己」と「個としての自己」という二つの自己観の違いがあることを示した。そして、これらは、文化心理学で言う「相互協調的自己観」と「相互独立的自己観」にそれぞれ対応するものであるとし、心理学的実証に支えられる自己観であるということを指摘した。もちろん、北山（1998：70）が認めるように、これら二つの自己観は二項対立的なものではなく、両者の間には国や文化によって段階性が見られることは確かである。また、異なる風土や習慣を持つ国を、西欧文化や東洋文化のように一括りにするということに関しても、問題が無い訳ではない。しかし、本稿で述べてきたように、言語や文化により異なる自己観が支配しているということを知ることは、外国語学習や異文化理解において非常に有益である。母語や外国語の根底にある文化的価値観を理解することによって、各表現を個別に学習するのではなく、様々な表現を一つの言語傾向として大局的に捉えることが可能になる。今後、ここで見た4つの言語表現以外の現象についても、同様の視座からの研究が行われれば、この可能性はさらに広まることが期待される。

〈参考文献〉

ベネディクト、ルース．2005［1972］．『菊と刀』東京：講談社．
バーガー、リチャード．2008．『「よろしくお願いします」と英語で言いたいあ

なたへキャノンの英語マンから 20 のアドバイス』東京：朝日新聞社.

Brown, P. and S. Levinson. 1978. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: CUP.

土居健郎. 1971.『「甘え」の構造』東京：弘文堂.

Green, G. 1975. How to get people to do things with words. In P. Cole & J. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics, Vol.3. Speech Acts*, pp. 107-142. New York: Academic Press.

Hall, E. 1976. *Beyond Culture*. New York: Doubleday Anchor books.

Hall, E. 1983. *The Dance of Life: The Other Dimentions of Time*. New York: Anchor Press.

庵　功男、高梨信乃、中西久美子、山田敏弘. 2001.『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』東京：スリーエーネットワーク.

川村晶彦. 2006.『日本人英語のカン違い　ネイティブ 100 人の結論』 東京：旺文社.

北山　忍. 1998.『自己と感情：文化心理学による問いかけ』東京：共立出版.

Kitayama, S. and Markus, H. 1991. Culture and the self: implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review* 98: 224-253.

Leech, G. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman.

Matsumoto, Y. 1988. Reexamination of the universality of face: politeness phenomena in Japanese. *Journal of Pragmatics* 12: 403-426.

水谷信子. 1985.『日英比較　話しことばの文法』東京：くろしお出版.

守屋三千代. 2002.「日本語の授受動詞と受益性～対照的な観点から～」『日本語日本文学』12：1-50.

中根千枝. 1967.『タテ社会の人間関係：単一社会の理論』東京：講談社.

直塚玲子. 1980.『欧米人が沈黙するとき―異文化間のコミュニケーション―』東京：大修館書店.

大杉正三. 1982.『英語の敬意表現』東京：大修館書店.

鈴木孝夫. 1973.『ことばと文化』（岩波新書）東京：岩波書店.

鈴木孝夫. 1983.「自称詞と対称詞の比較」國廣哲彌(編)『日英語比較講座　第5巻　文化と社会』pp. 17-59、東京：大修館書店.

滝浦真人. 2001.「敬語の論理と授受の論理 —— 聞き手中心性と話し手中心性を軸として」『月刊言語』30(5)：54-61.

Thomas, J. 1983. Cross-cultural pragmatic failure. *Applied Linguistics* 4: 91-112.

外山滋比古. 1992.『英語の発想・日本語の発想』東京：日本放送出版協会.

鶴田庸子、ポール・ロシター、ティム・クルトン. 1987.『英語のソーシャルスキル』東京：大修館書店.

Wierzbicka, A. 1985. Different cultures, different languages, different speech acts: Polish vs. English, *Journal of Pragmatics* 9: 145-178.

『ジーニアス英和大辞典』(電子辞書版) 東京：大修館書店.